

〔展 望〕

## 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築

岡 田 涼\*

近年、友人関係の形成や維持を動機づけの観点から捉えた研究が増えてきている。しかし、これまでの友人関係研究との理論的な統合がなされていないため、友人関係に対する動機づけという視点の独自性が明確ではない。本論文では、友人関係研究と近年の動機づけ研究の知見とを統合し、適応の支えとなる親密な友人関係が形成、維持される過程を動機づけの観点から捉えるモデルを構築することを目的とした。最初に、友人関係と適応や精神的健康との関連を示した知見を概観し、これまでの友人関係研究では、親密な友人関係を築いているか否かの個人差が説明されていないことを指摘した。次に、友人関係に対する動機づけを捉える概念を、達成目標理論、社会的目標研究、社会的認知理論、自己決定理論の観点から検討した。その後、友人関係に対する動機づけを起点として、適応の支えとなる親密な友人関係が形成、維持されるプロセスを捉えるモデルを提唱した。このモデルから、友人関係に対する動機づけ研究の独自性は、適応の支えとなる親密な友人関係を築いているか否かの個人差を説明し得る点であることが示唆された。

キーワード：友人関係に対する動機づけ、適応、友人関係の形成・維持

### はじめに

これまで、親密な友人関係が適応や精神的健康を高めることが多くの研究から示されており、その重要性が繰り返し指摘されてきた。しかし、誰もが適応の支えとなる親密な友人関係を築いているわけではない。友人との関わりのなかで適応的に過ごしているものもいれば、親密な友人関係をもたず精神的健康が阻害されているものもいる。

このような友人関係の個人差を説明する概念として、友人関係に対する動機づけに注目することができる。近年、社会的動機づけ研究の隆盛に相俟って、友人関係の形成や維持を動機づけの観点から捉えようとする研究が増えてきている。しかし、それらの研究は様々な理論的観点から個々に行われており、一連の研究知見としての包括的な枠組みが与えられていない。また、これまでの友人関係研究との理論的な統合が十分になされていないため、友人関係に対する動機づけという視点の独自性が不明確なままに研究が進められている。友人関係を動機づけの側面から捉える意義を明確にするためには、近年の動機づけ研究の知見をこれまでの友人関係研究に位置づけ、両者を統合的に捉え得る理論的なモデルを構築することが不可欠であろう。

本論文では友人関係研究における知見と近年の動機づけ研究の知見とを統合し、親密な友人関係が形成、維持される過程を動機づけの観点から捉えるモデルを構築することを目的とする。まず、親密な友人関係と適応や精神的健康との関連を示す知見を概観する。次に、友人関係に対する動機づけを捉える概念を、いくつかの理論的観点から整理する。一般的な動機づけの定義に倣い、本論文では友人関係に対する動機づけを「友人関係を形成、維持しようとする行動が生じる過程」とし、この過程を捉える動機づけ概念に焦点をあてる。その後、親密な友人関係が形成、維持される過程を動機づけの観点から捉えるモデルを提示し、モデルを支持する知見を示す。なお、児童期から青年期にかけて友人関係の重要性が高まること (Buhrmester & Furman, 1987; Hunter & Youniss, 1982)、また比較的多くの研究がなされていることから、今回は主に小学生から大学生までを扱った研究を対象とする。

### 友人関係研究の知見

友人関係は個人の適応や精神的健康に強く影響する重要な社会的関係として注目されてきた。Hartup & Stevens (1997) によると、友人は適応を促進する認知的、感情的な資源であり、年齢段階に応じた発達課題の達成を助けるものである。親密な友人関係を築くことは、日常を適応的に過ごしていくうえで重要な役割

\* 日本学術振興会・名古屋大学大学院教育発達科学研究科  
ryooo@r4.dion.ne.jp

を果たしていると考えられる。以下では、友人関係の特徴がどのように捉えられてきたかを概観し、友人関係と適応との関連を示す知見について述べる。

### 友人関係の測定

友人関係と適応との関連を検討するにあたって、友人関係をどのように測定するかが問題となる。その方法は、①自身の友人関係をどのように捉えているかという友人関係知覚 (friendship perception) を扱うもの、②他者からの評定を用いて客観的に友人関係を捉えるものの2つに大別できる。

友人関係知覚を測定する場合、友人関係がもつ複数の特徴を想定し、それらの特徴が自身の友人関係にどの程度あてはまるかを質問紙によって評定させることが多い。Berndt & Keefe (1996) は、中学生を対象に、友人関係がもつ特徴をポジティブなものとネガティブなものに区別して捉えている。ポジティブな特徴は自己開示、向社会的行動、自尊心のサポートであり、ネガティブな特徴は葛藤と対抗心である。Furman & Buhrmester (1992) は、小学生から大学生の友人関係について、信頼や親密な自己開示、道具的援助など10の観点を想定している。他にも多面的に友人関係の特徴を捉える試みがなされているが (Bukowski, Boivin, & Hoza, 1994; 榎本, 1999; Furman, 1996; 丹野, 2007)、援助行動や自己開示あるいは葛藤などが共通して見出されている。また、回答の対象となる“友人”は、特定の親しい友人を想定させることもあれば、友人関係全般を想定させる場合もある。

他者評定による方法の代表的なものとしては、ソシオメトリック・テストがある。ソシオメトリック・テストは、クラスなどの集団内で「一緒に遊びたいのは誰か」や「誰と友だちか」あるいは「好ましくないのは誰か」などを尋ね、指名された数を受容得点、拒絶得点、友人数などとして用いたり、相互の指名をもって友人関係を特定したりするものである (Birch & Ladd, 1996)。Wentzel, Barry, & Caldwell (2004) は、小中学生を対象にクラス内の親友3名を選択させ、相互に指名しているペアを双方向的な友人関係としている。また、クラスなど集団内のすべてのメンバーに対する好意や親しさを評定させ、その評定をもとに友人関係を特定したり、受容得点を算出する場合もある (Berndt, Perry, & Miller, 1988; Parker & Asher, 1993)。ただし、これらの方法は小学生に用いられることが多く、中学生以降を対象として用いられることは比較的少ない。

### 友人関係と適応との関連

これまで多くの研究で、友人関係と精神的健康や適

応との関連が明らかにされている。友人関係における自己開示や援助行動などは、自尊心や学校適応を高め、抑うつを低減することが示されている (Buhrmester, 1990; Keefe & Berndt, 1996; 小野寺・河村, 2002; Young, Berenson, Cohen, & Garcia, 2005)。一方、葛藤や対抗心は抑うつや落ち込みの高さと関連する (Burk & Laursen, 2005; Windle, 1994)。また、他者評定による友人関係を扱った研究では、級友からの受容や好意あるいは双方向的な友人関係が、孤独感や抑うつ、落ち込みを低めることが知られている (Parker & Asher, 1993; Vosk, Forehand, Parker, & Rickard, 1982; Wentzel et al., 2004)。

友人関係は様々な問題の解決を助ける社会的資源となる。信頼できる友人に自己を開示し、心理的な援助や具体的な援助を得ることで、困難な問題を解決することができる。また、親しい友人の存在は、親密さや関係性への欲求を満ちし、全般的な well-being を高めることにもなる (Baumeister & Leary, 1995; Buhrmester, 1996)。親密な友人関係は、適応や精神的健康を支えるうえで重要な機能をもつものであるといえるだろう。

### 友人関係研究の問題点

これまでの友人関係研究では、友人関係と適応や精神的健康との密接な関連が明らかにされてきた。そして、それらの知見をもとに、親密な友人関係を築くことの重要性が指摘されている。しかしその一方で、適応の支えとなる親密な友人関係を築いている個人とそうでない個人との相違がどのように生じるかについては、あまり検討がなされていない。親密な友人関係が重要であることに議論の余地はないが、必ずしもそのような関係を築いているものばかりではないだろう。適応の支えとなる親密な友人関係を築いているか否かには個人差が存在する。その個人差がどのように生じるのかを明らかにすることは、友人関係の側面から適応や精神的健康を支えようとする場合に不可欠であろう。

これまでも親密な友人関係がどのように形成、維持されるかに関してまったく研究がなされていないわけではない。例えば、友人関係の初期分化に関する研究では、関係初期の相互作用量が後の関係の親密さを予測することが知られている (Hays, 1985; 山中, 1994)。また、社会的スキルに関する研究では、友人関係を築くために必要ないくつかのスキルが特定されている (相川, 2000; 佐藤, 1996)。しかし、関係の初期において他者と関わろうとするか否か、あるいはスキルを用いて積極的に友人と関わろうとするか否かの個人差は依然として明らかにされていない。

本論文では、適応の支えとなる親密な友人関係の個

人差が生じるプロセスを捉える要因として、友人関係に対する動機づけに注目する。友人関係は、個人が友人に対して積極的に働きかけ、友人と相互作用を行うことで形成、維持されていくものであると考えられる。友人関係に対する動機づけは、友人に対する働きかけが生じる背後に想定される概念であり、友人との相互作用の起点となるものである。そのため、友人関係に対する動機づけに注目することで、親密な友人関係の個人差を捉えることができると考えられる。

### 友人関係に対する動機づけを捉える概念

動機づけ研究では、主に学習やスポーツなどの達成行動の生起過程を捉えるために様々な概念や理論が提唱されてきた。近年、友人関係に対する動機づけに関しても複数の理論的立場から概念化が試みられている。ここでは代表的なものとして、達成目標理論、社会的目標研究、社会的認知理論、自己決定理論を取り上げ、友人関係に対する動機づけを捉える概念を紹介する。

#### 達成目標理論

達成目標理論 (achievement goal theory : Dweck & Leggett, 1988 ; Nicholls, 1984) は、達成場面で個人がもつ目標志向性の観点から動機づけを捉えたものである。この理論では、達成場面における目標を熟達目標と遂行目標とに大別している。熟達目標は、学習や理解を志向し、個人内の基準に基づいて自己を改善することに焦点化する目標である。遂行目標は、自身の能力を示すことや自己価値の維持を志向し、他者を凌ぐことに焦点化する目標である。また、遂行目標は、他者に能力を示すことで自己価値を高めようとする遂行—接近目標と、無能さが露呈するのを避けることで自己価値の低下を防ごうとする遂行—回避目標に区分される (Elliot & Harackiewicz, 1996)。

これらの目標志向性が友人関係などの社会的場面にも適用可能であることは、早くから指摘されていた (Dweck & Leggett, 1988)。最近では、社会的場面での目標志向性を実証的に扱う研究がみられる (Erdley, Cain, Loomis, Dumas-Hines, & Dweck, 1997 ; Horst, Finney, & Barron, 2007 ; 黒田・桜井, 2003 ; Ryan & Shim, 2006)。Ryan, Kiefer, & Hopkins (2004) は、達成場面での目標に対応させ、社会的場面における目標志向性を概念化している。社会的熟達目標は、ポジティブな友人関係を築くことに焦点化し、関係それ自体を目的として行動する目標である。社会的遂行—接近目標は、他者からの肯定的な評価や人気を得ることに焦点化し、社会的な有能さを示すために行動する目標である。社会的遂行

—回避目標は、他者からの否定的な評価を避けることに焦点化し、社会的な能力の低さを示さないよう行動する目標である。他に、接近—回避の次元に特化して友人関係に対する目標を捉えた研究もある (Elliot, Gable, & Mapes, 2006)。

#### 社会的目標研究

達成目標理論は主に理由の観点に注目しているのに対して、友人関係に対する目標を内容の観点から捉え、複数の目標カテゴリーを設定するアプローチもある。この方法は、Wentzel (1989) や Ford (1982) による社会的目標の分類にみられるものである。

Jarvinen & Nicholls (1996) は、中学生が友人関係に対してもつ目標を分類し、支配、親密、養護、リーダーシップ、人気、回避の6つの目標を見出している。Patrick, Anderman, & Ryan (2002) は、友人関係に対する目標として、親密な友人関係を築こうとする親密目標と他者からの人気を得ようとする地位目標の2つを挙げている。Salmivalli, Ojanen, Haanpää, & Peets (2005) は、権力や他者からの尊敬を獲得しようとする作用目標、他者からの怒りを避けようとする服従目標、他者と親密な関係を築こうとする共同目標、他者と一定の距離を置こうとする分離目標の組み合わせから、友人関係に対する目標を捉えている。

#### 社会的認知理論

社会的認知理論 (social cognitive theory : Bandura, 1986) では、個人要因、環境要因、行動の相互作用によって人が機能することを想定している。自己効力感は、このなかの個人要因にあたり、望んでいる結果を生み出すのに必要な行動をどの程度うまくできるかの確信度を示す。学習に対する自己効力感、課題選択や努力量、学業達成に影響することが知られている (Multon, Brown, & Lent, 1991 ; Schunk & Pajares, 2002)。

自己効力感の概念は早くから社会的場面に適用され、主に児童を対象に友人や仲間との相互作用に対する自己効力感が検討されてきた (Perry, Perry, & Rasmussen, 1986 ; Wheeler & Ladd, 1982)。松尾・新井 (1998) は、対人的自己効力感を「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価」と定義し、友人との社会的相互作用に対する効力感を測定する尺度を作成している。Matsushima & Shiomi (2003) は、中高生の友人関係に対する効力感を、関係に対する自信、友人に対する信頼、友人からの信頼という3側面から測定している。

#### 自己決定理論

自己決定理論 (self-determination theory : Deci & Ryan,

2000)では、自律性(あるいは自己決定性)の1次元上に沿って、非動機づけ、外的調整、取り入れ調整、同一化的調整、統合的調整、内発的動機づけという複数の動機づけ概念を想定している。これらの動機づけ概念は、自律性の下位要素であるとされ、個々の下位尺度としてだけでなく、それらの合成変数をもって自律的動機づけとして扱われることが多い。

自律的動機づけの概念は、学習やスポーツをはじめとして、政治活動や恋愛関係など幅広く検討されてきた(Deci & Ryan, 2000)。友人関係の形成や維持に関しても、自律的動機づけの概念を用いて検討されている。岡田(2005)は、大学生を対象に、外的調整、取り入れ調整、同一化的調整、内発的動機づけからなる尺度を作成している。外的調整は、外的な報酬や友人からの働きかけによって関係を形成、維持する動機づけである。取り入れ調整は、自尊心を保ち、不安や恥ずかしさを低減するために関係を築こうとする動機づけである。同一化的調整は、友人との関係に積極的な価値や重要性を見出して関係に従事する動機づけである。内発的動機づけは、友人に対する興味や楽しさから関係を形成、維持しようとする動機づけである。Senécal, Julien, & Guay(2003)は、この4下位尺度に加えて、友人と関わろうとする意志を欠いた状態である非動機づけを測定している。同様の概念化は、高校生(Okada, 2007)や中学生(Shahar, Henrich, Blatt, Ryan, & Little, 2003)、小学生(Hawley, Little, & Pasupathi, 2002; Richard & Schneider, 2005)でも行われている。

#### 動機づけ概念間の関連

目標志向性、社会的目標、自己効力感、自律的動機づけは、いずれも友人関係に対する動機づけを捉える得る概念である。しかし、これらは異なる理論的観点から構成されたものであり、類似点と相違点がある。

伝統的に、動機づけを期待(expectancy)と価値(value)の積として捉える見方がある(Atkinson, 1957; Wigfield & Eccles, 2000)。期待とは主観的な成功可能性に関する信念であり、価値とは活動に対する主観的な価値づけである。自己効力感、友人関係をうまく築いていけるという期待の側面に相当し、目標志向性や自律的動機づけは友人と関わる理由を表しており価値の側面にあたる。社会的目標についても、友人関係場面において何を希求するかを捉えている点で、価値の側面に言及したものとして考えることができる。

また、鹿毛(2004)は、認知、感情、欲求のいずれに力点を置いているかという点から動機づけの諸理論を整理している。目標志向性と社会的目標は、友人関係

場面での目標を個人がどのように捉えているかという点から概念化されており、認知的なアプローチであるといえる。自己効力感、友人と相互作用を行う際の能力に関する信念であり、認知的な側面を強調した動機づけ概念である。自律的動機づけも、友人関係の形成や維持に対する理由の観点から概念化されており、認知的側面から動機づけを捉えたものといえる。ただ、自己決定理論は、自律性、有能感、関係性という基本的欲求が満たされることで人が自律的に動機づけられることを仮定しており、その点で欲求論的なアプローチであると考えられる(Deci & Ryan, 2000)。

このように、友人関係に対する動機づけを捉える概念には注目すべき異同がある。これらの類似点と相違点を踏まえたうえで、どの側面から友人関係に対する動機づけを捉えようとするのかを考える必要がある。

#### 友人関係の形成・維持過程の動機づけモデル

これまでの友人関係研究では、親密な友人関係が個人の適応や精神的健康と密接に関わっていることが示されてきた。その一方で、親密な友人関係の個人差を生じさせる要因については、あまり検討されていない。本論文では、その個人差を捉えるための要因として、友人関係に対する動機づけに注目し、いくつかの理論で想定されている動機づけ概念を概観した。友人関係に対する動機づけは、友人との相互作用における行動の生起を説明する概念であり、適応を支える親密な友人関係の形成や維持を捉えるうえで有効となる視点である。しかし、友人関係に対する動機づけの観点から、親密な友人関係の個人差が生じるプロセスを包括的に捉えたモデルは存在しない。

本論文では、動機づけを起点として適応を支える親密な友人関係が形成、維持されるプロセスをFigure 1に示すモデルとして捉える。このモデルでは、環境要因や個人内要因から友人関係を介して適応に影響するプロセスを動機づけの側面から捉えている。親子関係や教室環境といった個人を取り巻く環境的な要因あるいは個人がもつ特性的な要因が、友人関係に対する価値や期待としての動機づけのあり方に影響する。動機づけのあり方は友人関係場面における具体的な行動を生起させ、その結果として友人関係に影響する。このようにして形成された友人関係は、後の動機づけに影響すると同時に、個人の全般的な適応や精神的健康を促すことになる。この一連のプロセスにおいて、動機づけの側面は環境要因や個人内要因と友人関係との関連を説明する要因であると同時に、個人が友人関係を

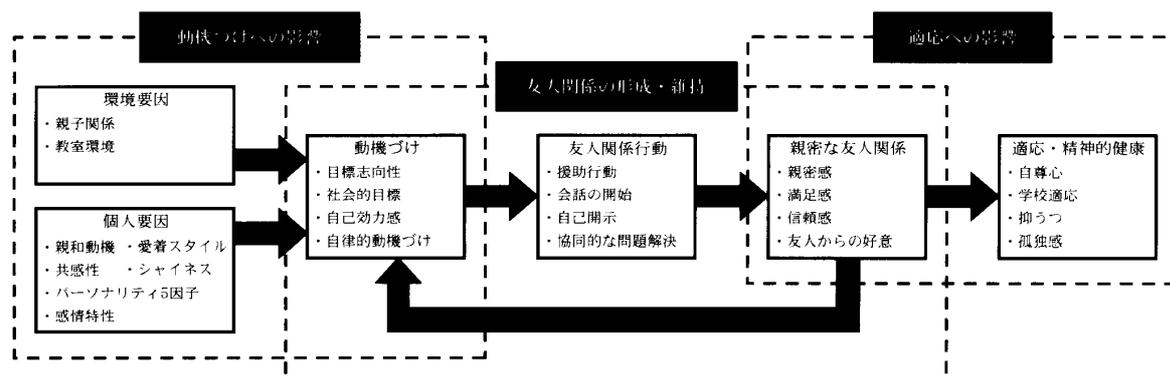


Figure 1 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデル

築いていく際の起点として考えることができる。

以降ではモデルを3つの段階に分けて検討する。1つ目は、環境要因や個人内要因あるいは友人関係での経験が友人関係に対する動機づけに影響する段階である(動機づけへの影響段階)。2つ目は、動機づけのあり方が親密な友人関係の形成や維持に影響する段階である(友人関係の形成・維持段階)。3つ目は、前々節でみたように、親密な友人関係が適応や精神的健康に影響する段階である(適応への影響段階)。このうち、動機づけへの影響段階と友人関係の形成・維持段階について、それを支持する知見を踏まえながら論じる。

#### 動機づけへの影響段階

友人関係に対する動機づけに影響する要因としては、環境要因と個人内要因が考えられる。環境要因に関して、これまで友人関係との関連が指摘されてきたものに親子関係がある。いくつかの研究で、親の養育態度が子どもの友人関係に影響することが明らかにされている(Price, 1996; 戸ヶ崎・坂野, 1997)。このような親子関係と友人関係との関連性は、友人関係に対する動機づけによって媒介されている可能性が考えられる。親子関係は他者との関係を築く際のモデルとなることで、他の社会的関係の基盤となり得る(Kerns, 1996)。そのため、親との関係でどのような経験をするかによって、友人と関わろうとする際の動機づけが異なると考えられる。この点について、Soenens & Vansteenkiste (2005)は、高校生を対象として、母親の自律性支援的な養育態度が友人関係に対する自律的動機づけを促すことを明らかにしている。

親子関係の他に、友人関係に対する動機づけに影響すると考えられるのは教室環境である。これまでの研究では、学級風土や教師行動が児童・生徒の友人関係に影響することが明らかにされている(Birch & Ladd, 1996; Lubbers, Van Der Werf, Snijders, Creemers, & Kuyper,

2006)。児童・生徒にとって、友人関係が展開する主要な場は教室である。そのため、教室環境がどのようなものであるかによって、児童・生徒の友人関係に対する動機づけが影響を受けることが考えられる。Patrick, Ryan, & Kaplan (2007)は、中学生を対象に、教室環境と自己効力感との関連を検討している。その結果、生徒同士の相互作用やお互いの尊敬を促すような教室では、友人と関わる際の自己効力感が高かった。

個人内要因としては、様々な個人特性の影響が考えられる。これまで、親和動機(Hill, 1987; McAdams, Healy, & Krause, 1984)や愛着スタイル(金政, 2007; Wei, Russell, & Zakalik, 2005)、パーソナリティ5因子モデル(Jensen-Campbell, Adams, Perry, Workman, Furdella, & Egan, 2002)、感情特性(Cooper, Okamura, & Gurka, 1992; 水子・寺崎・金光, 2002)、シャイネス(石田, 1998; Mounts, Valentiner, & Anderson, 2006)、共感性(de Wied, Branje, & Meeus, 2007; Roberts & Strayer, 1996)など、対人関係に関わる個人特性の観点から友人関係の問題が検討されてきた。これらの他者全般に関する個人特性が友人関係という具体的な対人関係に影響する過程には、友人関係に対する動機づけを想定することができる。諸特性のあり方によって、どのように友人関係の形成や維持に動機づけられるかが異なり、その結果として友人関係面での行動や感情が規定されていると考えられる。Elliot et al. (2006)は、親和傾向と拒否不安という親和動機の2つの側面が、友人関係に対する接近目標と回避目標を介して精神的健康に影響するプロセスを示している。親和動機の2側面は、友人関係に対する自律的動機づけとも関連する(岡田, 2006b)。Wei et al. (2005)は、大学生を対象に、愛着不安が社会的自己効力感を介して孤独感や抑うつに影響するプロセスを明らかにしている。友人関係に固有の動機づけを想定することで、他者全般に関わる個人特性が具体的な対人関係にどのよ

うに反映されていくかをより詳細に捉えることが可能になる。

環境要因と個人内要因は、いずれも友人関係の外側から影響を与える要因である。しかし、友人関係が相互に影響を及ぼし合う双方向的な関係であることを考えれば(遠矢, 1996), 友人関係のあり方によっても動機づけが影響を受ける可能性がある。友人関係においてどのような経験をするかによって、現在の友人との関係に対する動機づけや新たな友人関係を築こうとする動機づけが異なってくると考えられるのである。岡田(2008b)は、大学生を対象に友人関係でのライフイベントと自律的動機づけとの関連を検討している。その結果、活動の共有や関係の悪化など強い感情を喚起するような出来事を経験することで、自律的動機づけが影響を受ける可能性が示された。また、Erdley(1996)は、友人や仲間との関係のなかで拒絶を経験した子どもは、追従的な目標をもちやすく、受容を経験した子どもは、関係志向的な目標をもちやすいとしている。これらの知見は、友人関係での経験によって、後の動機づけが変化し得る可能性を示すものである。

以上の知見から、友人関係に対する動機づけが環境要因や個人内要因によって影響されるプロセスを想定することができる。また、友人関係での経験も後の動機づけを左右する要因となり得る。友人関係の形成や維持に対してどのように動機づけられるかは、様々な要因に規定されており、その背景を多面的に捉える必要がある。しかし、友人関係に対する動機づけの先行要因について検討した研究は極めて少ない。複数の理論的観点からさらに知見を蓄積することが求められる。

#### 友人関係の形成・維持段階

友人関係の特徴を記述したこれまでの研究では、自己開示や援助行動などの行動的側面と形成された友人関係の様態をあらわす側面とが、明確には区別されていない( Berndt & Keefe, 1996 ; Furman & Buhrmester, 1992)。しかし、友人関係は既に形成されたものとして存在しているのではなく、個人が友人に働きかけ、相互作用を行うことで展開していくものであると考えられる。実際、自己開示や援助行動が、友人関係の親密さや満足感、友人からの好意評定に影響することが示されている( Buhrmester, Furman, Wittenberg, & Reis, 1988 ; Oswald, Clark, & Kelly, 2004)。また、自己開示や向社会的行動は、自身の行動に対して相手から同等の行動が返されるという返報性や相互性という特徴をもつことが知られている( Barry & Wentzel, 2006 ; 大坊, 1996 ; Oswald et al., 2004)。これらのことから、個人が友人に

対して働きかけることで相互作用が生じ、その結果として親密な友人関係が形成、維持される過程を想定することができる。そこで、本論文のモデルでは、親密な友人関係の形成や維持に寄与する行動的側面と、その働きかけによって形成、維持される友人関係の様態の側面とを区別し、前者を友人関係行動、後者を親密な友人関係として位置づけた。親密な友人関係の様態の側面は、どの程度個人が友人関係に親密さや満足感を感じているかや、どの程度友人から好意的に思われているかなどの指標に反映されると考えられる。

動機づけは行動の背後に想定される概念である。そのため、友人関係に対する動機づけによって促される友人関係行動は、友人との相互作用の開始点となり、その結果として親密な友人関係が形成、維持されるプロセスが考えられる。このプロセスに関しては、いくつかの理論的観点から検討がなされている。達成目標理論の観点からは、熟達目標( Ryan et al., 2004) や接近目標( Elliot et al., 2006) が、友人関係に対する満足感に影響することが示されており、個人の目標志向性が親密な友人関係の形成や維持に影響している可能性がある。黒田・桜井(2003)は、中学生を対象に、経験・成長目標や評価—接近目標が、積極的な会話の開始や援助行動を促すことで、友人からポジティブな反応を引き出し、友人関係に対する充実感が高まるプロセスを明らかにしている。自己決定理論の観点からは、自律的動機づけが自己開示や援助などの友人関係行動を促し(岡田, 2005, 2006a), 友人関係に対する満足感や友人からの好意に影響することが示されている( Okada, 2007 ; Richard & Schneider, 2005)。これらの知見から、自律的動機づけが友人関係行動を介して親密な友人関係の形成や維持を促すことが考えられる。また、社会的目標や社会的効力感の観点からも、同様のプロセスの存在が示されている。Ojanen, Gronroos, & Salmivalli(2005)は、小学生を対象に、友人との間に親密な関係を築こうとする共同目標が向社会的行動を介して級友からの好意に影響することを明らかにしている。他に、親密目標や養護目標が友人関係に対する充実感を高めること( Jarvinen & Nicholls, 1996) や、自己効力感と級友からの好意との間に関連があること( Bandura, Barbaranelli, Caprara, & Pastorelli, 1996 ; Wheeler & Ladd, 1982) などが報告されている。

また、動機づけによる友人関係の形成、維持プロセスは、学習場面でも生じる可能性がある。岡田(2008a)は、中学生において、友人関係に対する自律的動機づけをもつものは、友人と協同的に学習する機会が多く、

その結果として友人関係に対する充実感や満足感を高めていることを明らかにした。他にも、社会的目標や自己効力感が、学業的援助要請や友人との学習活動に影響することが示されている (Okada, 2007; Patrick et al., 2007; Ryan, Hicks, & Midgley, 1997)。友人関係は日常の様々な場面で展開するものであり、それは学習場面においても例外ではない。友人関係に対する動機づけのあり方は、学習場面での友人との関わりを介して親密な関係の形成や維持に影響していると考えられる。

以上から、友人関係に対する動機づけを起点に、友人関係行動を介して親密な友人関係が形成、維持されるプロセスの存在が示唆される。すなわち、友人関係に対する動機づけのあり方が、親密な友人関係を築いているか否かの個人差に影響していると考えられるのである。ただ、友人との相互作用に関して、これまで個人と友人の両面から動機づけや友人関係行動を測定した研究はみられない。両者の動機づけや友人関係行動を測定し、相互作用を直接捉える研究が必要である。

### まとめと今後の課題

本論文では、適応の支えとなる親密な友人関係が形成、維持されるプロセスを動機づけの観点から捉えるモデルを提唱した。このモデルは友人関係研究の知見と動機づけ研究の知見を理論的に統合するものである。

これまでの友人関係研究では、適応や精神的健康との関連から、親密な友人関係の重要性が繰り返し指摘されてきた。しかし、適応の支えとなる親密な友人関係を築いている個人とそうでない個人との相違がどのように生じるかという点については、明らかにされていなかった。友人関係に対する動機づけ研究の知見は、この点を補完するものとして位置づけることができる。本論文で提唱したモデルでは、友人関係の形成や維持に対してどのように動機づけられるかによって、友人との相互作用が異なり、その結果として友人関係のあり方が影響されるプロセスを想定している。つまり、適応の支えとなる親密な友人関係を築いているか否かの個人差を、動機づけの差異として捉えることができるのである。この点は従来の友人関係研究では検討されてこなかった部分であり、友人関係を動機づけの観点から捉えるアプローチの独自な点であるといえる。

本論文のモデルからは、動機づけの側面に働きかけることで、親密な友人関係の形成を通して適応を支援し得る可能性が示唆される。社会的スキル・トレーニングでは、友人に対して援助的に関わったり、適切に自己を開示するスキルを学習させる試みがなされてき

た (Asher, Parker, & Walker, 1996)。しかし、適切なスキルを身につけているか否かと、積極的に他者と関わろうとするか否かは別の観点であり、スキルの側面に注目するだけでは必ずしも十分とはいえない。適切なスキルを獲得していたとしても、積極的に関わろうとしなければ親密な関係を築くことはできないからである。磯部・堀江・前田 (2004) は、社会的スキルを獲得しているにもかかわらずそれを実行しない社会的実行の欠如に注目し、親和動機の低さが社会的スキルの実行を妨げている可能性を示している。実際、社会的スキル・トレーニングによる友人関係や適応の改善が報告される一方で (江村・岡安, 2003; 石川・小林, 1998), その効果の持続性や日常場面への般化を示さない研究も少なくない (相川, 1999; Fox & McEvoy, 1993)。近年では、社会的スキルを考えるうえで、自己効力感や目標などの動機づけ変数に注目する必要性が指摘されている (Berndt & Keefe, 1996; Erdley, 1996; 松尾・新井, 1997; 戸ヶ崎, 2002)。友人関係に対する動機づけは、様々なスキルを用いて積極的に友人と関わる際の起点となる要因である。動機づけへの介入的なアプローチは、社会的スキル・トレーニングとは異なる側面から適応を支援することにつながると考えられる。

今後の課題として、次の3点を指摘したい。1つ目は、動機づけによる親密な友人関係の形成、維持プロセスに関する発達的な特徴を検討することである。本論文では、小学生から大学生までを対象とした研究知見に基づきモデルを構成したが、発達段階による差異を考慮しなかった。友人関係は生涯にわたって適応を支える機能をもつものの (Hartup & Stevens, 1997), その特徴には発達段階による違いがみられることも知られている (Hunter & Youniss, 1982; La Gaipa, 1979)。動機づけによって親密な友人関係が形成されるプロセスが、小学生から大学生へ進むにつれて、質的にも量的にも変化していく可能性が考えられる。各発達段階における友人関係の特徴を考慮したうえで、友人関係に対する動機づけの役割を明らかにする必要がある。

2つ目は、動機づけへの介入による変化を実証的に検討することである。先に、友人関係に対する動機づけに介入することで、適応や精神的健康を支援し得ると述べたが、そのためには介入によって友人関係に対する動機づけを変化させることができなければならない。これまで、友人関係に対する動機づけに関しても、目標志向性 (Erdley et al., 1997) や内発的動機づけ (Boggiano, Klingler, & Main, 1986), 自己効力感 (Rabiner & Coie, 1989) を実験的に操作する試みがなされている。しか

し、その研究数は極めて少なく、知見の蓄積は十分ではない。また、友人関係に対する動機づけを介した適応支援を目的として、教室環境の設定や教師行動の変容を目指した実践的な研究はほとんど存在しない。友人関係に対する動機づけへの介入を試みることは、今後の重要な方向性の一つである。

3つ目は、友人関係のネガティブな側面を動機づけの観点から捉えることである。本論文のモデルでは、友人関係行動として、自己開示や援助行動など親密な友人関係の形成や維持を促す要因にのみ注目した。しかし、友人関係には葛藤や対抗心のようなネガティブな側面も存在する (Berndt & Keefe, 1996 ; Rook, 1998)。友人関係に対する動機づけによって友人関係が形成、維持される過程で、ネガティブな側面がどのような働きをするかについて検討することが必要である。

友人関係に対する動機づけの研究は端緒についたばかりである。本論文で提唱したモデルは、研究の方向性に関して一つの枠組みを与えるものといえよう。さらに知見を蓄積することで、友人関係に関する現象を動機づけの観点から包括的に捉えることが望まれる。

#### 引用文献

- 相川 充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14**, 95-105. (Aikawa, A. (1999). Experimental studies of the effects of social skills training on reducing loneliness. *Japanese Journal of Social Psychology*, **14**, 95-105.)
- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術 サイエンス社
- Asher, S. R., Parker, J. G., & Walker, D. L. (1996). Distinguishing friendship from acceptance : Implications for intervention and assessment. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence* (pp. 366-405). New York : Cambridge University Press.
- Atkinson, J. W. (1957). Motivational determinants of risk taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action : A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Multifaceted impact of self-efficacy beliefs on academic functioning. *Child Development*, **67**, 1206-1222.
- Barry, C. M., & Wentzel, K. R. (2006). Friend influence on prosocial behavior : The role of motivational factors and friendship characteristics. *Developmental Psychology*, **42**, 153-163.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong : Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Berndt, T. J., & Keefe, K. (1996). Friends' influence on school adjustment : A motivational analysis. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation : Understanding children's school adjustment* (pp. 248-278). New York : Cambridge University Press.
- Berndt, T. J., Perry, T. B., & Miller, K. E. (1988). Friends' and classmates' interactions on academic tasks. *Journal of Educational Psychology*, **80**, 506-513.
- Birch, S. H., & Ladd, G. W. (1996). Interpersonal relationships in the school environment and children's early school adjustment : The role of teachers and peers. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation : Understanding children's school adjustment* (pp. 199-225). New York : Cambridge University Press.
- Boggiano, A. K., Klinger, C. A., & Main, D. S. (1986). Enhancing interest in peer interaction : A developmental analysis. *Child Development*, **57**, 852-861.
- Buhrmester, D. (1990). Intimacy of friendship, interpersonal competence, and adjustment in preadolescence and adolescence. *Child Development*, **61**, 1101-1111.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence* (pp. 158-185). New York : Cambridge University Press.
- Buhrmester, D., & Furman, W. (1987). The development of companionship and intimacy. *Child Development*, **58**, 1101-1113.

- Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 991-1008.
- Bukowski, W. M., Boivin, M., & Hoza, B. (1994). Measuring friendship quality during pre- and early adolescence : The development and psychometric properties of the Friendship Qualities Scale. *Journal of Social and Personal Relationships*, **11**, 471-484.
- Burk, W. J., & Laursen, B. (2005). Adolescent perceptions of friendship and their associations with individual adjustment. *International Journal of Behavioral Development*, **29**, 156-164.
- Cooper, H., Okamura, L., & Gurka, V. (1992). Social activity and subjective well-being. *Personality and Individual Differences*, **13**, 573-583.
- 大坊郁夫 (1996). 対人関係のコミュニケーション  
大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 (pp.205-230) 誠信書房
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits : Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, **11**, 227-268.
- de Wied, M., Branje, S. J. T., & Meeus, W. H. J. (2007). Empathy and conflict resolution in friendship relations among adolescents. *Aggressive Behavior*, **33**, 48-55.
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.
- Elliot, A. J., Gable, S. L., & Mapes, R. R. (2006). Approach and avoidance motivation in the social domain. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 378-391.
- Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996). Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 461-475.
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, **51**, 339-350. (Emura, R., & Okayasu, T. (2003). Classroom-based social skills education : Junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 339-350.)
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190. (Enomoto, J. (1999). Socio-emotional development of friendship among adolescents : Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 180-190.)
- Erdley, C. A. (1996). Motivational approaches to aggression within the context of peer relationships. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation : Understanding children's school adjustment* (pp. 98-125). New York : Cambridge University Press.
- Erdley, C. A., Cain, K. M., Loomis, C. C., Dumas-Hines, F., & Dweck, C. S. (1997). Relations among children's social goals, implicit personality theories, and responses to social failure. *Developmental Psychology*, **33**, 263-272.
- Ford, M. E. (1982). Social cognition and social competence in adolescence. *Developmental Psychology*, **18**, 323-340.
- Fox, J. L., & McEvoy, M. A. (1993). Assessing and enhancing generalization and social validity of social skills interventions with children and adolescents. *Behavior Modification*, **17**, 339-366.
- Furman, W. (1996). The measurement of friendship perceptions : Conceptual and methodological issues. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence* (pp. 41-65). New York : Cambridge University Press.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1992). Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, **63**, 103-115.
- Hartup, W. W., & Stevens, N. (1997). Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, **121**, 355-370.
- Hawley, P. H., Little, T. D., & Pasupathi, M. (2002). Winning friends and influencing peers : Strategies of peer influence in late childhood. *International Journal of Behavioral Development*

- ment, **26**, 466-474.
- Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 909-924.
- Hill, C. A. (1987). Affiliation motivation : People who need people... but in different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008-1018.
- Horst, S. J., Finney, S. J., & Barron, K. E. (2007). Moving beyond academic achievement goal measures : A study of social achievement goals. *Contemporary Educational Psychology*, **32**, 667-698.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. (1982). Changes in function of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, **18**, 806-811.
- 石田靖彦 (1998). 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, **14**, 43-52. (Ishida, Y. (1998). The effect of shyness on friendship development and loneliness. *Japanese Journal of Social Psychology*, **14**, 43-52.)
- 石川芳子・小林正幸 (1998). 小学校における社会的スキル訓練の適用について カウンセリング研究, **31**, 300-309. (Ishikawa, Y., & Kobayashi, M. (1998). A study on the effects of application of social skills training for elementary school children : A small-group training in the classroom. *Japanese Journal of Counseling Science*, **31**, 300-309.)
- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一 (2004). 非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係 カウンセリング研究, **37**, 15-22. (Isobe, M., Horie, K., & Maeda, K. (2004). The relationship between social skills and affiliation motives in delinquent and non-delinquent junior high school boys. *Japanese Journal of Counseling Science*, **37**, 15-22.)
- Jarvinen, D. W., & Nicholls, J. G. (1996). Adolescents' social goals, beliefs about the causes of social success, and satisfaction in peer relations. *Developmental Psychology*, **32**, 435-441.
- Jensen-Campbell, L. A., Adams, R., Perry, D. G., Workman, K. A., Furdella, J. Q., & Egan, S. K. (2002). Agreeableness, extroversion, and peer relations in early adolescence : Winning friends and deflecting aggression. *Journal of Research in Personality*, **36**, 224-251.
- 鹿毛雅治 (2004). 「動機づけ研究」へのいざない 上淵 寿 (編著) 動機づけ研究の最前線 (pp.1-28). 北大路書房
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, **22**, 274-284. (Kanemasa, Y. (2007). The relationships between early adult attachment styles and adjustment in friendships. *Japanese Journal of Social Psychology*, **22**, 274-284.)
- Keefe, K., & Berndt, T. J. (1996). Relations of friendship quality to self-esteem in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, **16**, 110-129.
- Kerns, K. A. (1996). Individual differences in friendship quality : Links to child-mother attachment. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence* (pp. 137-157). New York : Cambridge University Press.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2003). 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム—ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討— 教育心理学研究, **51**, 86-95. (Kuroda, Y., & Sakurai, S. (2003). Goal orientation in peer relations and depression among preadolescents : “Distress-generation” and “eustress-generation” models. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 86-95.)
- La Gaipa, J. J. (1979). A developmental study of the meaning of friendship in adolescence. *Journal of Adolescence*, **2**, 201-213.
- Lubbers, M. J., Van Der Werf, M. P. C., Snijders, T. A. B., Creemers, B. P. M., & Kuyper, H. (2006). The impact of peer relations on academic progress in junior high. *Journal of School Psychology*, **44**, 491-512.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1997). 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響 教育心理学研究, **45**, 303-311. (Matsuo, N., & Arai, K. (1997). Effects of emotion and goal on children's behavior selection. *Japanese Journal of*

- Educational Psychology*, **45**, 303-311.)
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, **46**, 21-30. (Matsuo, N., & Arai, K. (1998). Relationship among social anxiousness, public self-consciousness and social self-efficacy in children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 21-30.)
- Matsushima, R., & Shiomi, K. (2003). Developing a scale of self-efficacy in personal relationships for adolescents. *Psychological Reports*, **92**, 177-184.
- McAdams, D. P., Healy, S., & Krause, S. (1984). Social motives and patterns of friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 828-838.
- 水子 学・寺崎正治・金光義弘 (2002). 感情特性が対人相互作用量に及ぼす影響—結果予期と効力予期の媒介的役割 性格心理学研究, **10**, 98-107. (Mizuko, M., Terasaki, M., & Kanemitsu, Y. (2002). Effects of positive and negative affectivity on interpersonal interaction : Mediating roles of outcome and efficacy expectations. *Japanese Journal of Personality*, **10**, 98-107.)
- Mounts, N. S., Valentiner, D. P., & Anderson, K. L. (2006). Shyness, sociability, and parental support for the college transition : Relation to adolescents' adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*, **35**, 71-80.
- Multon, K. D., Brown, S. D., & Lent, R. W. (1991). Relation of self-efficacy beliefs to academic outcomes : A meta-analytic investigation. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 30-38.
- Nicholls, J. G. (1984). Achievement motivation : Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, **91**, 328-346.
- Ojanen, T., Gronroos, M., & Salmivalli, C. (2005). An interpersonal circumplex model of children's social goals : Links with peer-reported behavior and sociometric status. *Developmental Psychology*, **41**, 699-710.
- 岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから— パーソナリティ研究, **14**, 101-112. (Okada, R. (2005). Development of friendship motivation scale in the framework of the self-determination theory. *Japanese Journal of Personality*, **14**, 101-112.)
- 岡田 涼 (2006a). 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **15**, 52-54. (Okada, R. (2006a). Autonomous friendship motivation, self-disclosure, and adjustment. *Japanese Journal of Personality*, **15**, 52-54.)
- 岡田 涼 (2006b). 自律的な友人関係への動機づけの基礎としての親和動機 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 268.
- Okada, R. (2007). Motivational analysis of academic help-seeking : Self-determination in adolescents' friendship. *Psychological Reports*, **100**, 1000-1012.
- 岡田 涼 (2008a). 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, **56**, 14-22. (Okada, R. (2008a). Autonomous motivation in learning activities with friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **56**, 14-22.)
- 岡田 涼 (2008b). 友人関係場面における感情経験と自律的な動機づけとの関連—友人関係イベントの分類— パーソナリティ研究, **16**, 247-249. (Okada, R. (2008b). Friendship events, affective experience, and motivation in friendship. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 247-249.)
- 小野寺正巳・河村茂雄 (2002). 中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, **35**, 47-56. (Onodera, M., & Kawamura, S. (2002). A study on the effects of junior high school students' self-disclosure in the classroom on adjustment to their class. *Japanese Journal of Counseling Science*, **35**, 47-56.)
- Oswald, D., Clark, E. M., & Kelly, C. M. (2004). Friendship maintenance : An analysis of individual and dyad behaviors. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 413-441.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood : Links with peer group acceptance and feelings

- of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611-621.
- Patrick, H., Anderman, L. H., & Ryan, A. M. (2002). Social motivation and the classroom social environment. In C. Midgley (Ed.), *Goals, goal structures, and patterns of adaptive learning* (pp. 85-108). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Patrick, H., Ryan, A. M., & Kaplan, A. (2007). Early adolescents' perceptions of the classroom social environment, motivational beliefs, and engagement. *Journal of Educational Psychology*, **99**, 83-98.
- Perry, D. G., Perry, L. C., & Rasmussen, P. (1986). Cognitive social learning mediators of aggression. *Child Development*, **57**, 700-711.
- Price, J. M. (1996). Friendships of maltreated children and adolescents : Contexts for expressing and modifying relationship history. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence* (pp. 262-285). New York : Cambridge University Press.
- Rabiner, D., & Coie, J. (1989). Effect of expectancy inductions on rejected children's acceptance by unfamiliar peers. *Developmental Psychology*, **25**, 450-457.
- Richard, J. F., & Schneider, B. H. (2005). Assessing friendship motivation during preadolescence and early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, **25**, 367-385.
- Roberts, W., & Strayer, J. (1996). Empathy, emotional expressiveness, and prosocial behavior. *Child Development*, **67**, 449-470.
- Rook, K. S. (1998). Investigating the positive and negative sides of personal relationships : Through a lens darkly ? In B. H. Spitzberg & W. R. Cupach (Eds.), *The dark side of close relationships* (pp. 369-393). Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Ryan, A. M., Hicks, L., & Midgley, C. (1997). Social goals, academic goals, and avoiding seeking help in the classroom. *Journal of Early Adolescence*, **17**, 152-171.
- Ryan, A. M., Kiefer, S. M., & Hopkins, N. B. (2004). Young adolescents' social motivation : An achievement goal perspective. In P. R. Pintrich & M. L. Maehr (Eds.), *Advances in motivation and achievement : Vol.13. Motivating students, improving schools : The legacy of Carol Midgley* (pp. 301-330). Greenwich, CT : JAI Press.
- Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2006). Social achievement goals : The nature and consequences of different orientations toward social competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 1246-1263.
- Salmivalli, C., Ojanen, T., Haanpää, J., & Peets, K. (2005). "I'm OK but you're not" and other peer-relational schemas : Explaining individual differences in children's social goals. *Developmental Psychology*, **41**, 363-375.
- 佐藤正二 (1996). 子どもの社会的スキル・トレーニング 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する (pp.173-200) 誠信書房
- Schunk, D. H., & Pajares, F. (2002). The development of academic self-efficacy. In A. Wigfield & J. S. Eccles (Eds.), *Development of achievement motivation* (pp. 15-31). San Diego, CA : Academic Press.
- Senécal, C., Julien, E., & Guay, F. (2003). Role conflict and academic procrastination : A self-determination perspective. *European Journal of Social Psychology*, **33**, 135-145.
- Shahar, G., Henrich, C. C., Blatt, S. J., Ryan, R. M., & Little, T. D. (2003). Interpersonal relatedness, self-definition, and their motivational orientation during adolescence : A theoretical and empirical integration. *Developmental Psychology*, **39**, 470-483.
- Soenens, B., & Vansteenkiste, M. (2005). Antecedents and outcomes of self-determination in 3 life domains : The role of parents' and teachers' autonomy support. *Journal of Youth and Adolescence*, **34**, 589-604.
- 丹野宏昭 (2007). 友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能 パーソナリティ研究, **16**, 110-113. (Tanno, H. (2007). Interaction frequency and functions of friendship for under-

- graduates. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 110-113.)
- 戸ヶ崎泰子 (2002). 社会的スキルの獲得 坂野雄二・前田基成 (編著) セルフ・エフィカシーの臨床心理学 (pp.166-177) 北大路書房
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から— 教育心理学研究, **45**, 173-182. (Togasaki, Y., & Sakano, Y. (1997). Effects of mother's attitude for child rearing on social skills and school adaptation in elementary school children : From the point of view of the attitude for child rearing of active refusal type. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 173-182.)
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 (pp.89-116) 誠信書房
- Vosk, B., Forehand, R., Parker, J. B., & Rickard, K. (1982). A multimethod comparison of popular and unpopular children. *Developmental Psychology*, **18**, 571-575.
- Wei, M., Russell, D. W., & Zakalik, R. A. (2005). Adult attachment, social self-efficacy, self-disclosure, loneliness, and subsequent depression for freshman college students : A longitudinal study. *Journal of Counseling Psychology*, **52**, 602-614.
- Wentzel, K. R. (1989). Adolescent classroom goals, standards for performance, and academic achievement : An interactionist perspective. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 131-142.
- Wentzel, K. R., Barry, C. M., & Caldwell, K. A. (2004). Friendships in middle school : Influences on motivation and school adjustment. *Journal of Educational Psychology*, **96**, 195-203.
- Wheeler, V. A., & Ladd, G. W. (1982). Assessment of children's self-efficacy for social interaction with peers. *Developmental Psychology*, **18**, 795-805.
- Wigfield, A., & Eccles, J. S. (2000). Expectancy-value theory of achievement motivation. *Contemporary Educational Psychology*, **25**, 68-81.
- Windle, M. (1994). A study of friendship characteristics and problem behaviors among middle adolescents. *Child Development*, **65**, 1764-1777.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115. (Yamanaka, K. (1994). A study of early differentiation of relatedness in relationship development among college students. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **34**, 105-115.)
- Young, J. F., Berenson, K., Cohen, P., & Garcia, J. (2005). The role of parent and peer support in predicting adolescent depression : A longitudinal community study. *Journal of Research on Adolescence*, **15**, 407-423.

#### 謝 辞

本論文を執筆するにあたりご指導いただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科の速水敏彦先生に厚くお礼申し上げます。また、貴重なご示唆をいただきました愛知教育大学の伊藤崇達先生に感謝致します。  
(2008.1.16 受稿, 7.19 受理)

## *Process of Friendship Formation and Maintenance : Development of a Motivational Model*

*RYO OKADA (THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION AND HUMAN DEVELOPMENT, NAGOYA UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 575—588*

The purposes of the present article were to synthesize findings about friendship and friendship motivation, and to develop a motivational model of the process by which individuals form and maintain close friendships. A review of research on the relations between friendship and adjustment suggested that individual differences in whether or not people form and maintain close friendships have not yet been analyzed. Next, constructs of friendship motivation were examined based on several theoretical viewpoints, including achievement goal theory, social goal research, social cognitive theory, and self-determination theory. Finally, a model was proposed according to which friendship motivation influences the formation and maintenance of close friendships, which, in turn, support adjustment. This model suggests that research about friendship motivation should focus on individual differences in the formation and maintenance of close friendships.

Key Words : friendship motivation, adjustment, formation and maintenance of close friendships, motivational model